

被爆から蘇った広島経済 ～広島とともに～

日本銀行広島支店では、今年開設 100 周年を迎えられることになり、誠におめでとうございます。心からお慶び申し上げます。

先般来、その記念としていろいろな行事がとり行われて今日に至っておりますが、その一環として、「何かこの歴史にふさわしい話をするように」とのご依頼がありました。恐らく私が日本銀行の出身であり、終戦後間もなく、この広島支店に勤務したこと、さらにその後 20 年を経て支店長として勤務したこと、そしてその後またご縁があって、はからずも長期間地元の広島相互銀行、現在はもみじ銀行となっておりますが、その広島相互銀行の経営に当たってきたことで、広島経済界の推移、歴史にもなじみがあるからということでしょうか。

たまたま今年は終戦後、そして広島としては原爆被災後 60 年の節目の年でもありますが、被爆で生き残った数少ない建物の 1 つであり、しかも二度の勤務をしたこの旧広島支店の建物の中で、決して忘れることのできない思い出を含めてお話しする機会を得たということは、私にとって本当に感慨深いものを覚えるのであります。

ところで、日本銀行広島支店は当初、明治 38 年 9 月 1 日、出張所と

して開設され、明治 44 年 6 月 1 日に支店に昇格いたしており、全国の支店の中でもかなり古い歴史をもっております。

広島市には当時、陸軍の第 5 師団があり、呉には海軍鎮守府があって、国庫金の出納が忙しく、また金額的にも大きく、この地方における資金流通の便宜を図るための設置となったわけであります。そしてこの袋町の建物は、昭和 11 年 8 月に新築されたもので、極めて堅牢な建物であったため、爆心地から僅か 380 メートルの近距離にあったにも拘らず倒壊を免れ、原形を維持したまま生き残ることができました。

私がこの支店に初めて着任いたしましたのは、終戦の年の昭和 20 年の 11 月 1 日でありました。

私はもともと福岡市の生まれで、それまで広島市を訪れたことは一度もありませんでした。東京の大学に入学して、福岡と東京を随分往復したのですが、広島駅に着くのは大体深夜であることもあって、全く素通りで下車したことはありません。大学を卒業して日本銀行に入行したのが昭和 17 年 1 月、つまり太平洋戦争が始まった直後であり、やがて私も海軍に応召することになりました。

終戦になって復員し、日本銀行の職員に戻ることをお願いしたのですが、福岡支店勤務の予想に反して、広島支店の勤務を命じら

れたのであります。広島支店では被爆により行員の多くが死傷されていたため、補充の必要があり、当時軍隊帰りの者を数多く投入したものであると思います。当時広島は75年間草木も生えぬと伝えられており、これは大変なことになったと思いましたが、赴任しないわけにも参りません。周囲の人々からも心配され、しっかり注意しながら生活するようにと散々脅かされながら、10月末日の早朝、福岡を出発して広島に向かいました。列車はノロノロ運転で復員帰りの人々も多く超満員、広島に着いたのは夕暮れ時で、列車の窓からホームに飛び降りた記憶があります。見ると駅舎の屋根はすべて吹き飛んでおり、駅前に出ると一面の焼け野原で遮るものがなく、似島がすぐ目の前に見えました。聞きしに勝る惨状で、とたんに心細くなりました。目指す支店の場所、袋町はどう行ったらよいのか勿論判ろう筈もなく、たまたま駅前を通りかかった人に道筋を聞きますと、怪訝な面持ちで「あんた、この日暮れに袋町に何しに行きんさるの。この方向に行けば良いのだけれど、あの辺りには誰も人は住んでいないよ」と言われ、これは大変な所に来たとガッカリしました。でも駅前の瓦礫の下から小さな草が顔を出しているのをみて「ああ草が生えているぞ」と、まずは「何とか生きていくことが出来る、大丈夫だ」とホッと胸をなでおろす気分になっ

たのも事実でありました。辺りは薄暗くなって参りますし、大通りも殆ど人の気配はありません。早く行かなければとの思いで、教えられたとおり参りますと、紙屋町の交差点に行きつきます。そこから左に折れるわけですが、ガランとしたビルの残骸が連なるだけで、とても人のいるような気配はありません。途方に暮れておりますと、遥かに人の声、そして何か歌を歌っているような人の声がかすかに聞こえて参ります。「ああ、人がいるぞ」と元気を出してその方向をたよりに参りますと、その歌声を発している所が目指す袋町の日銀広島支店の焼け残った建物であったわけです。

丁度その日に着任した新任の次長を真ん中に、支店の有志が車座になって氣勢をあげて歓迎会をやっている最中で、モノのない時代、怪しげなアルコールのようなものを飲んでいたと思いますが、私が顔を出すと、「よく来た、よく来た」と私もその中に入れられて大歓迎を受けホッとした次第でした。地元の人で自分の家から通勤できる人は良いのですが、他の地域から転勤して来た人は近くに宿泊する場所はありません。結局は銀行の建物の中に寝泊まりをしているわけです。この日から私の初めての広島生活が始まりました。

ここで原爆被爆当時の状況について触れておきたいと思います。

昭和 20 年 8 月 6 日当時は勿論私はいなかったわけですから、被爆記録や当時被爆した人達の証言などを参考に申し上げてみたいと思います。先程も申し上げましたとおり、広島支店は爆心より近距離にあり、猛烈な熱線と爆風の衝撃を受けて建物は甚大な被害を受けましたが、構造堅牢のため倒壊を免れました。建物はご覧のとおり 3 階建てですが、当時 3 階は中国財務局が入っておりました。その 3 階と 2 階の一部に火災が発生し、内部を焼失しましたが、大事には至りませんでした。1 階の営業場、それに地下金庫は無事でしたが、建物のシャッターや窓枠はすべて破壊され、その破片でかなりの人が負傷したり死亡したりしています。当時の支店の職員は 85 名、被爆当時店内にいた人は支店長以下 18 名で、うち死亡者 8 名、重傷者 5 名、軽傷者 5 名と伝えられており、吉川支店長も重傷を負われました。2 階の支店長室から 1 階の営業場に吹き飛ばされたとも伝えられております。出勤途上あるいは自宅での死亡者 34 名、負傷者 5 名に上ったとの記録があります。財務局の職員は 3 階の事務室で 12 名が死亡されております。心からご冥福をお祈りしたいと思います。

このような状況で 8 月 6 日当日は、遺体の処理や、負傷者の手当てなどで店内は大混乱となったようであります。その中には外部からの

負傷者や運び込まれた遺体もあったと思われます。当日駆けつけた人の手記を引用しますと、「南通用門入口には重傷を負った幾多の職員と全身焼けただれて苦しむ人で、足を踏み入れることも出来ない。窓より忍び込めば、小使室と廊下には死体と沢山の重傷者が鮮血に染まり、枕を並べて倒れていた。これら多数の重傷者はガラスの破片、シャッターその他の飛散物で裂傷を負い、あたかも鋭利な刃物で断ち切ったかの如く無数の傷があり、断末魔の叫び、水を求める声、苦悶のうめき、実に凄惨を極めた」とあります。

このような状況の中で、翌々日の8月8日から早くも業務を再開したわけですが、これは本当に容易なことではなかったと思います。重傷に屈せずこのような決断をし、指示をした当時の支店長吉川智慧丸氏（吉川さんは役員であり、理事でもありました）には全く頭の下がる思いがいたします。営業場に散乱したシャッターやガラスの破片などは、軍隊の出動を要請して速やかに整理をしてもらい、翌7日には市中銀行の代表者を召集し、差し当たり日銀の店舗を共同店舗とし、市内の銀行各行が日銀支店に入って8日から営業を開始することを決定し、それとともに金融安定に関する宣伝方を指示したと言われております。記録によりますと、当時の市中銀行は10行余り（芸備、住友、

安田、帝国、三和、興銀、勸銀、農中、商中、日本貯蓄、三菱、庶民金庫)、8日午前10時半から営業を開始したそうです。各行に割当てた窓口の幅は、地元芸備銀行(現広島銀行)が事務机2脚分、その他の各行には1脚分で、各行とも出勤者は1~2名に過ぎなかったそうです。当時芸備銀行の副頭取で伊藤豊さんという方がおられました。大変な実力者で、のちに全国地方銀行協会の会長にもなりましたが、この方の体験記を郷土史家で経営史研究会の田辺良平さんが紹介されておりますので、かいつまんでお伝えしたいと思います。伊藤さんは8月6日、当日被爆した芸備銀行本店に駆けつけられたのでありますが、銀行は地下から地上5階に至るまで火を吹いて一步も踏み込めません。そのうちに集まってきた行員に対して、負傷者を病院に運ぶことなどを指示して日本銀行広島支店を訪ね、理事で支店長の吉川智慧丸氏と相談して、幸いに火災を免れた日本銀行支店内で営業を行うことを決められたということです。什器、備品や文具類は総て日銀のものを借用することで話し合いがつけられました。営業開始に当たっての資金は、伊藤副頭取が借用証を書いて日銀から借入れをすることとしたのでありますが、総て副頭取と吉川支店長の独断でことは進められたと言われています。預金の払出しや火災保険金の受け取りに来た顧客の

殆どが、通帳や印鑑のない者ばかりでありましたが、これも副頭取の采配で無通帳や無印鑑でも極力支払に応じるよう指示されたと言います。また、復興資金の貸出なども迅速に実行されたと伝えられております。その際、権利者の認定識別は千差万別で取り扱いには困難を極めたが、各銀行とも力を合わせて臨機応変の親切な態度をとったことは、金融史上銘記すべきことだと言われております。そして、伊藤副頭取は「このように銀行の営業再開が速やかに行われたのは、1つには日銀広島支店の吉川支店長の度量ある態度で、重傷を負っているわが身をいとわず営業場に出て、常に預金者に不安を与えてはならぬ、早く処理してあげよと督励しておられるなど、非常特別の便宜供与による措置のおかげであると述懐されていた」と伝えられております。

なお、私が後に勤務した広島相互銀行の前身である広島無尽株式会社の営業再開は銀行よりも遅れて8月25日になったのでありますが、証書をもって来ない人達ばかりで、やむを得ず住所と姓名を書かせ、それに認印と拇印を押させて簡単に支払をしたそうです。これも非常の事態でやむを得なかったのでありましょうが、その後の調査によれば、二重に支払ったり騙しとられたりした例は、1件としてなかったそうです。荒廃窮迫の極に達した時でありましたが、「人間の性はやはり

善である」ことを役職員一同が感得したという記録が残されておりま
す。恐らく銀行の場合も概ね同様ではなかったかと思われ、感銘を深
くするものであります。それはともかくとして、金融機関の営業再開
が速やかに行なわれたことは、復興の最初のスタートがここに始まり、
市民の復旧に対する意欲が沸き上がるキッカケを作ったことは間違い
ないと思います。それについては、当事者の大変な努力は申すまでも
ありませんが、日銀の建物が堅牢であり営業場や金庫が無事で、金庫
の中の多額の銀行券などに全く損傷がなかったことが基本にあったと
いうことも間違いのないと思うのであります。これは日本銀行広島支店
開設 100 周年の歴史の中でも特記すべきことであつたと思つておりま
す。

なお、共同使用していた市中銀行も、遂次自店焼跡などで応急店舗
の建設にとりかかり、早いものは 8 月末から、その他も 9 月頃それぞ
れ復歸していった由であります。

そこで、私が広島に着任してからのことに戻ります。私は 11 月 1 日
付けで辞令を受け仕事を始めたわけですが、入行後 3~4 年経つてはい
るものの、軍隊の期間もあり実質的には新入行員同様に、同僚にも大
体そういうのが多かつたのですが、何をやらせてもすぐには役には立

たず、上司にも随分迷惑をかけたように思います。何れかというと庶務的なことを数多くやらされました。戦地からの引揚者の方の在外財産報告書の受付や、資金調整法による融資の申請の受付、そして審査といった仕事もやりました。

当時広島地方の産業は、軍需産業をはじめ潰滅状態を取り敢えず食糧品の製造、特に従来からの地元産業でもあった塩田の造成に関する融資の申請がポツポツあったのが記憶に残っております。まだまだ本格的な復興には程遠いものがありました。そのうちに当時呉市にあった駐留軍（占領軍）軍政部との連絡に関する事務を命ぜられ、支店長の随行で、あるいは単独でも、しばしば呉に出かけたものです。当時占領軍はどのようなものか、日銀によく来て、主に金融経済情勢に関する資料の提出を命じたりする傾向がありました。このような仕事は全く初めてのことで、言葉の問題もありますし、随分苦勞したように思います。呉には外務省の出先である終戦連絡事務局があり、いろいろと支援していただきました。駐留軍の兵隊も決して高圧的なところはありませんでした。軍政部の担当官のチーフのような役目をしていた人で、米国陸軍少佐で克蘭デルという人がいました。本当に紳士でいつも親切に対応され、感銘を受けたことが強く印象に残っております。

す。

やがて、昭和 21 年 2 月 16 日には金融緊急措置令、日本銀行券預入令、臨時財産調査令が施行され、これにより預金封鎖、新円切り替えなどが行なわれ、日銀の窓口は多忙を極めました。私はその措置に伴う事務の取扱いについて、管内各地の銀行協会などで説明をする役を仰せつかったのでありますが、事務経験が乏しく、俄か勉強でありますので、やや込み入った質問に立ち往生してしまうという苦い思い出もあります。

さて、先にも申しましたとおり、当初の暫くの間は私ども他地域からの転勤組は、銀行の一室の土間に雑魚寝をしておりました。焼け残りの汚い畳を敷き、陸軍からの復員組は陸軍のカーキ色の毛布をかけるのですが、私は数少ない海軍からの復員で海軍の白い毛布を広げます。すると皆が寄ってきて、ここは帝国ホテルだと羨ましそうに言うのですね。でも次第に冬の季節になってきて、開いている窓からは容赦なく寒い風が吹き込んで参ります。そうするとさすがに耐え難くなって、どこか適当な住むところがないかと思っておりましたところ、地元の方のお世話で安佐南区祇園町のある農家の 2 階 6 畳位の部屋を同僚 3 人で借りることになったのであります。

仕事が忙しく、特に新円切り替えの多忙な 2 月の寒い時期は、帰りが夜 10 時、11 時になることもよくありまして、銀行から 1 歩外へ出ますと真っ暗です。その中を原爆ドームの横をとおり、相生橋から太田川沿いの土手の道を、遙か横川駅あたりのわずかな光を一心に見つめながら足早に歩いたものです。横川からの終電車の時刻もとっくに過ぎていたので祇園まで歩かなければなりません。よく歩いたと思いますが、軍隊帰りであったので歩くこと自体はそんなに苦にはならず、むしろ寺町の墓地の辺りを一人で歩くことの気味の悪さのほうが辛かったように思います。

やがて、広島駅や横川駅の付近に闇市など小さなバラック小屋がかなり建って参りましたが、まだまだ復興という感じには程遠いものがありました。そんなことで支店の職員は随分苦勞が多かったのでありますが、このような特殊事情をも勘案し比較的短い期間で転勤させるといった配慮が行われました。そして私も 8 か月程で広島を去ることになったのであります。原爆被災の職員と一緒に仕事をしていた人の何人かがその後、後遺症で逝去されましたのは大変残念なことであります。

転勤後広島を訪れる機会もなく、私の脳裏には一面焼け野原、瓦礫

の町の印象しかなかったのですが、奇しくも 20 年の歳月が過ぎて、昭和 41 年 5 月、支店長として 2 度目の広島支店勤務をすることになったのであります。こうして 20 年ぶりに広島を訪れた私は見違えるほど立派に復興した広島の姿に接して、驚きと深い感銘を受けました。見覚えがあるのは日銀支店と原爆ドームぐらいのものです。あの焼け野原からどうしてここまで復興発展したのか、しかも戦後の日本経済が辿った高度成長の軌跡をさらに上回るような発展をなし得たのはどういう理由によるものか、深い関心をもったわけであります。

その中心的役割を演じたのは重化学工業化の動きで、造船、自動車、鉄鋼、機械、石油化学など製造業が大きな柱となってこの地域の経済発展をもたらしたものと思います。

昭和 35 年から 5 年間の都道府県別人口の増減をみますと、中四国、九州地方の中で広島県が唯一の人口増加県で、あとは軒並み人口が減少しております。戦前この地方は北九州の工業地帯と阪神地方の工業地帯を結ぶ廊下のような存在で、産業的に特に目立った地域ではありませんでした。それがこのように急速な工業化が進み経済が発展してきたのはどういう理由によるものか。

考えられる第 1 点は、戦前の広島と呉の両市は有数の軍都であり、

軍隊に付随して兵器、被服、糧秣の各廠があり、また呉には海軍工廠があつてその下請け工場が数多く存在しておりました。また造船はこの地方の古くからの産業であり、これらが大きな経済発展の基盤になったものと思われまゝす。

第 2 点は、やはり軍に関係があるわけですが、戦後民間に軍需産業の遺産が払い下げられて、これが非常にうまく民需のほうに転換したことであります。これはひとり、軍の施設だけでなく、当時の軍需工場内部で育成された近代工業技術や熟練労働者の存在も大きな役割を果しているものと思われまゝす。

第 3 点は、戦後のエネルギー革命で石炭から石油の時代に移行したわけではありますが、それが瀬戸内沿岸の臨海型工業立地に好条件をもたらしたということでもあります。

第 4 点は、この地方の人の問題であります。広島県は戦前から文理科大学、高等師範の設置をみるなど教育県としても著名で県民の教育水準が高いという伝統をもつておりました。このことが経済的にみても近代工業に不可欠な良質の技術者や工場で働く人の供給に貢献してきたものと思われまゝす。

以上のようなことがあげられますが、昭和 24 年には「広島平和記念

都市建設法」が公布施行され、これも経済発展に寄与したものと思います。

このようにして、広島地域の経済は発展して参ったのでありますが、特に広島市中心に考えれば、この発展過程において経済界の結束が強かったことをあげておく必要があると思います。その中心をなしたのは「二葉会」というグループであります。

そのメンバーは東洋工業、現在のマツダ、中国電力、広島銀行など 10 社（現在 11 社）で、今日においてもいわば親睦団体のような形で存続しておりますが、もともとこのような会が結成されたのは昭和 28 年、漸く戦後の復興が軌道に乗りかけた頃であります。

そのキッカケとなったのは、ロータリークラブの西日本地区大会の開催地が昭和 28 年の福岡市のあとを受けて、翌昭和 29 年が広島市に決定されたことであつたように聞いております。このような地区大会をやるためには多くのロータリアンを集める大きな会場が必要となりますが、ひどく戦災を受けました広島には適当なものがございません。そこで、当時、山陽木材防腐株式会社（現 ザイエンス）の社長であつた田中好一さんが当時広島経済界の主要トップ、その代表的な方は東洋工業の松田恒次さんでありましたが、広島財界有志で公会堂を

建設し広島市に寄付をしたらどうだろうか」と相談を持ちかけられたのであります。それは大変結構なことだということで、これが実現し、ロータリーの大会には間に合いませんでしたが、立派な公会堂ができたのであります。この寄付に賛同した当時の主要企業が10社で、これを機に「二葉会」というグループができたわけで、今後も郷土広島のために、広島発展のために必要な公共の事業を支援していこうということになったのであります。その二葉会の支援協力によりまして、その後広島市民球場をはじめいろいろな施設を造るのに、また公共のための寄付をすることに大きな貢献をされたのであります。

その他主なものをあげてみますと、広島バスセンター、西条のゴルフ場、広島県庁舎、ステーションビルなど主要施設に関連した寄付や出資などであります。そしてまた、二葉会と中央における広島出身の政財界との親密な連携が行われてきたことも見逃すことは出来ません。

このような活動を通じ、文字どおり二葉会は広島経済界のリーダー的存在となり、広島商工会議所の会頭も二葉会各社の持ち回りのような形となった時代があります。私はこのような郷土の発展を願い、これを主導した二葉会の存在は、戦後の広島経済の復興発展に大変大きな役割を果たしたと思うのでありまして、このことはやはり後世に伝え

られるべきではないかと思うのであります。

この二葉会のリーダーは田中好一さんですが、人間的に懐の深い魅力的な方で、決して閉鎖的な考え方の人ではありませんでした。私も大変お世話になり深く感謝しております。私は広島相互銀行に入行した直後、昭和 45 年頃から仲間に加えていただいたのですが、当時まだ田中さんをはじめ、結成当初からの白井市郎さん、藤田定市さん、森本亨さんといった人々が健在でした。先程も申しましたとおり、この二葉会は現在では環境の変化もあり親睦団体のような形で残っている一方、リーダー的な役割は当然のことながら広島商工会議所の方に移っていると思います。

なお、私の広島支店長在任中のことに関連し、広島支店店内における慰霊碑建立のことを申し添えておきたいと思います。昭和 40 年 9 月、広島支店開設 60 周年を迎えました際、原爆被災による物故者の慰霊碑を店内に建立したいとの要望が強まり、行員、そして OB の方からの募金により実現することになりました。昭和 41 年 8 月 6 日、その除幕式が行われました。その慰霊碑は旧店舗 3 階の壁面を利用、大理石に銅版をはめこんだもので、現在は新店舗の方に移されております。

さて、私は 3 年間の広島勤務を終えて昭和 44 年の春に本店勤務にな

りましたが、当時の広島相互銀行からの強い要請を受けまして、早くもその秋には広島に戻って参りました。思いがけず 3 度目の広島ということになりますが、その後、はからずも今日まで広島在住 35 年余の長きに及んでおり、すっかり広島人になりました。

ところで広島経済は、昭和 30 年代の後半から高い伸びを示して参りましたが、昭和 48 年秋の石油危機を転機として高度成長の裏目が出るようになったのであります。当地方の主力産業が重化学工業、つまり石油多消費型の重厚長大産業であったからで、自動車や造船の受けた影響は大変大きかったように思います。広島市を中心にみますと、自動車の東洋工業と造船の三菱重工を頂点に数多くの下請けや関連の中小企業が連なっておりました。特に東洋工業では、公害の低いロータリーエンジン搭載車の実用化を率先した矢先、ガソリンの消費量が多いということで出鼻を挫かれたような感じでした。このような急速な落ち込みから如何に挽回するか、かなりの苦心と努力が重ねられましたが、その後平成 6 年に広島でアジア競技大会が行われることになったのに伴い、これを大きな目標として関連の施設や基盤整備が進められ、景気の下支えが行われたのも事実でしょう。この頃になると全国的にも景気回復の動きが出てきて、石油ショック後の著しい低迷か

らは離脱することができたように思います。

その後、バブルの発生、崩壊、その後の長期低迷と現在に到るまでかなりの期間を過ぎておりますが、今後の発展を含め、基調的には必ずしも余り明るい道筋が見えてきていないような気もいたします。この頃でもよく、地方の中核都市である札幌、仙台、広島、福岡の四都市の中で、誠に残念なことなのですが、広島は最も元気がない等とよく言われております。因みに福岡は北九州の炭鉱地帯をバックに発展し、特に戦後の立ち上がりは石炭、鉄鋼への傾斜生産方式がとられたこともありまして、大変活況を呈したのでありますが、間もなく石油エネルギー革命で炭鉱の閉山が相次ぎ急速に落ち込みました。それからの脱却は大変だったと思いますが、商業都市としての新たな方向を目指し、九州全域の中核都市として、また韓国、中国等大陸への窓口としての機能を充実させることによって、急速な立直しを実現したのであります。

そこで今後の広島ということではありますが、大きな方向として、1つはこの地域に集積度の高い製造業の技術力（生産力）というものを新しい経済環境に適応するよう発展させていくとともに、それに関連して新しい産業を誘致するということでしょうか。もう1つは大きな

課題として、今後の産業発展の基礎条件となるものを速やかに整備していくことで、これは都市の中枢性を高めるためにも大変大切なことであると思います。

つまり都市内部の交通網の整備、都市再開発そして広範な情報機能の強化などがありますが、広島もひと頃からみればそれぞれ進展はしてきていると思います。でも、他都市に比べればどうでしょうか。

何か古くて新しい問題ですが、こうした問題に関連し、かつて私が経済同友会の代表幹事を仰せつかった時期によく議論されたのは、「広島では重要な地域の課題について、各方面から実に多くの立派な提言がなされ、行き届いた調査分析も出来ているのに、これらのことが実行という段階になると遅々として進行しない。何故そうなのか」ということでありました。

大分時間が経っておりますが、今日でも或いは当てはまる面もあるかと思しますので敢えて申し上げるわけですが、このような問題意識の上に広島とは何か、広島人の特性をどう理解すべきかを掘り下げて研究しようということになりました。各分野における有識の諸先生方からこの問題についての忌憚のないお話をしていただき、「広島を考える」と題してとりまとめたのであります。

その中で広島人気質というものについて、議論され問題にとり上げられた点をご参考までにあげてみましょう。

1 つには、気候風土に恵まれ過ぎていて、積極性に欠け、ともに手を携えて繁栄に向かって努力する意識、つまり連帯感が乏しいのではないかと、

2 つには、軍都という歴史の中で、お上への依存性が強く、商人はとくに努力しなくても金儲けができたのではないかと、

3 つには、閉鎖性がある、よそ者を受入れ難い傾向がないかと、

4 つには、付和雷同性があり、誰かが少しばかり刺激的な言動を示すとすぐ尻馬に乗る傾向がないかと、

などという点で、広島人にとっては大変手厳しい指摘になりました。勿論このような見解自体について、いろいろとご批判があろうかと存じます。でも、このような問題が今日においても、何等かの反省材料に少しでもなり得るならば、そういう意識で今後の広島の発展を見つめ、展望していくことも必要ではないだろうかと思うのであります。

実は、この連帯感という問題意識から福岡市と比較すると、福岡は街をあげてのお祭りがあるのに、広島は8月6日の静かなお祈りの日はあるけれども、街をあげての明るいお祭りはない。これが地域の連

帯感や活性化に関係はないだろうかということ、やはり私の代表幹事時代の経済同友会で問題を取り上げたことがあります。

そして有志相集い博多祇園山笠祭りの最中に福岡市を訪問し、福岡の経済同友会と交流懇談をしたことがあります。幸いにして広島も間もなくフラワーフェスティバルというお祭りができまして今日に至っておりますが、今後の発展を大いに期待したいものです。

いろいろと口はばったいことを申し上げましたが、常に地域全体の活性化・発展を頭において、前向きに工夫を重ねていくことが肝要ではないでしょうか。

札幌、仙台、広島、福岡、四つの地方中枢都市の中でも最も元気の良い広島でありたいと思っております。

なお、広島市については世界最初の被爆地として、世界的にも知名度が高いのでありますが、ご承知のとおり「国際平和文化都市」を標榜して参りました。でもその実態はどうなのか、具体的にどう説明したらよいのでしょうか。平和への広島の姿勢は、従来とかく過去の尊い犠牲に依存し、戦争の悲惨さを示すことで世界の恒久平和や核兵器の廃絶を訴え続けて参りました。それが今後も大切なことは申し上げるまでもありません。それとともに、私はこの国際平和文化都市をも

う少し前向きに捉えて、次に申し上げるようなイメージを描いてみたいのであります。

つまり、「都市の景観が美しく、市民の心が豊かで文化のレベルが高く、国際的に魅力のある都市」であります。

幸いにして、広島都市美を形成する基礎条件は太田川や瀬戸内海の美しい海や島など極めて恵まれたものがあります。これは是非活かしていくべきであろうと思います。市民の心が豊かであるということは、市民一人一人が思いやり、相手の立場に立って物事を考えられるゆとりを持つことで、これはそのまま平和の心に通ずるものであります。「広島に行ったらとても親切にしてもらって、本当に爽やかな思いがした。また是非行ってみたい」と思われるような都市にしたいものです。そして、また市民の努力によって文化のレベルを向上させていく、これも大いに期待したいものです。

私はかつて「小さな親切運動」のお世話を仰せつかっておりましたが、平成6年のアジア競技大会で大勢のお客様を広島に迎える時期に、

「心の豊かな街づくり運動」を展開したことがあります。平和の心を市民自体が体現し行動する。そうした意味で、「さすがに平和都市の市民だ」と評価を受けることができましたならば、どんなに素晴らしい

ことでしょう。

さらにそのような環境の中で要望したいのは、広島がもっと積極的に平和に寄与し得る役割や機能を追及できるような都市作りであります。ウィーンに参りますと、ドナウ川のほとりに、国連の国際原子力機関や国連工業開発機関などの本部が置かれており、国連都市と称されるような国連の重要拠点となっております。

オーストリアが第2次大戦後中立国となり、国連の幅広い活動に積極的に参加していることとの関連が大きいと思われまます。そのような環境のなかで、ウィーンでは各種国際会議も頻繁に開催されております。ジュネーブでも国際労働機関など国際機関が数多く設置されております。そこで我が広島も国際的に知名度の高い都市ですから、このウィーンやジュネーブのような国連の重要拠点、つまりアジアにおける国連都市になり得ないでしょうか。大変難しい夢のような話かもしれませんが、申し上げてみたわけでありまます。広島では、2003年7月国連訓練調査研究所（ユニタール）アジア太平洋地域広島事務所（本部はジュネーブ）が開設されましたが、何かその小さな芽が出てきているような気もいたしまます。

以上、何か雑然としてとりとめのないような話をして参りましたが、

被爆により、全く焼け野原となった広島が戦後急速に復興したその力強いエネルギーを今後も十分に活かし、ますます発展を続けますことを心から祈りながら私の拙いお話を終わりたいと存じます。

ご静聴、誠に有難うございました。

以 上